
問題の多い介護士志願

砂月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

問題の多い介護士志願

【著者名】

NO692N

砂月

【あらすじ】

田村鞠子は介護方面の職を将来の夢にする21歳である。人の交友を大事に思う性格の彼女なのだが、実は大きな問題を抱えていた。

（前書き）

この作品は介護福祉士を目指す人にとって不適切な表現を含んでいる可能性があります。

介護福祉士を目指す方は戻るボタンを押すか、覚悟のうえで閲覧してください。

その日はとても良い天気だった。

日本の夏は蒸し暑くて過ごしづらいと言う意見もあるが、私の住んでいる地域は空気がカラリと乾いていて、日陰に入るだけで簡単に涼をとることができる。特に、近所の丘の上にある公園などは風も吹くうえに湧き水から流れる小川もあり、さらには間近では五月蠅くてかなわない蝉が鳴く木々から適度に距離を置いた屋根つきベンチまで設置されている。ちなみにベンチは一部の人々の間では夏の風物詩を涼しい風と共に楽しめるスポットとして利用されているのだ。

その一部の人々の中には、読書家の田村鞠子も名を連ねている。別に名を連ねたからといって名誉があるわけではない。夏の屋外で何時間もベンチに腰掛けるばかりの姿などは健康的な若者のイメージからは程遠いだろう。しかし、私はここで本を読むのが好きなのであって、やめるつもりはない。

あ、良い風が吹いた……。

「……」

私は、図書館やスターバックス等に移動するつもりは無い。

ここはとにかく気持ちがいいのだ。私のこの気持ちを分かってくれる人間も少なからずいて、たまには誰かと同席することだってある。あまり大勢が集まると敵わないけれど、余裕を持って4人ほど座れる丸いベンチが一杯になることはめったにない。

今日もまた、良い天気なうえに公園にも人気が無くて、とても過

「いやや。」

「おや、今日も居たのですか？」

「あ、笹原のお爺さん、」

「お爺さんちばな」

やつ思つていたといひで、なかなか思い通りにはいかないらしい。本を読むのに夢中になつてこらつちにもう一人、ベンチの常連がやつてきた。

「本当にここがお好きなんですね」

「ええ、まあ。不思議と居心地が良いものですから」

「お爺さんは昔から、私が初めて来た日よりずっと前から、夏のこの時期にここに本を読むのが習慣になつていていたらしい。どのくらい昔からなのかはわからないが、ここに居心地が昔から変わつていいのだと思つて、少し不思議な気分になる。

それに何十年も昔から変わることが無によつて、歴史的にも大切な場所ならばなおさら敬意をもつて全身で堪能しなくてはいけない。特にお爺さんを見習つて、読書で。

「今日は何の本を読んでいるのですか？」

「えつと、障害者の方のための本を何冊か……。私、なにげに読むの早いんですね？」

興味深そうに私の読む本を眺めるお爺さんに、脇に積んである既読の物をいくつか貸してみる。

「これは……。どれも立派な本ですな」

「なんて書いてあるかわかりますか？」

「いや、じついう勉強はしたことが無いので、私にはわづぱりです。」

しかし、いひこう本が大切なのは一目見ただけでよくわかります

笠原のお爺さんは最近になって私がどんな本を読んでいるのか尋ねてくるようになった。それがどうこうつもりなのかはわからないが、これほどの年長者に良い勉強をしていくと言われるのは、くすぐつたくも悪い気はしない。

「将来はやはりどちらの方に就職されるのですか？」

「はい、そのつもりです」

そちらの方とは障害者介護のことだらう。確かに私の夢はだいたいそのあたりの職業だ。

私とお爺さんはなかなかに親しい仲だと自称できる程度には気心は知れている。気の置けない仲といっても過言ではない。それだけにいつも本を読みながらポツリポツリと、しかしながらプライベートに踏み込んだ話までできたのだ。

「私には、一人娘が嫁ぎ先で生んだ孫がいましてな。いや、嫁ぎ先はすぐ近所なんですがね」

お爺さんが語り始めたとき、これは長い話になるぞと思つた。

「どんなお孫さんなんですか？」

「ちょうど、貴女と同じくらいの年です。孫も貴女と同じように介

護についての勉強に熱心に取り組んでいました……」

私と同じくらいの年、とはいっても私は昔から成長していないと言われる程に童顔だから、お爺さんの想像する孫とは5歳程度の年の開きがあつてもおかしくない。私がその頃に読んでいた本は、よく思い出せない。介護についての本だったような気はする。

お爺さんはどこか遠くを見るような目をしていたが、すぐに私に視線を戻す。

「どうしてそんなに熱心に勉強するんだと尋ねると、その理由がまたいじらしいんですね」

「どんな理由だったんですか？」

「私は昔、足を悪くしたことがありましたね。そのときの私の様子を見て、助けてあげたいと思つたから、だそうです」

そう語るお爺さんの表情は、まさに爺馬鹿全開といった具合のものだった。老人のそのうえ孫自慢ときたら、その話の勢いは往々にして留まるところを知らないものだらう。

「子供の頃から『じいじ、じいじ』と呼びながら私の後ろから小さい足で追いかけて來たものです。ああ、このベンチの上で本を読み聞かせてやつたこともありますね……」

「仲がとても良いのですね」

「まあ……。そう、ですな……」

間違いはないと思つて述べた感想だったのだが、お爺さんの反応は私が予想していたものとは違つ。もしや、今は不仲なのだろうか。だとしたらあまりにも無茶な話の振りである。お爺さんの話ぶりから察する限りではそのようには思えないが……。

私が気まずそうにしていると、お爺さんは話を付け足した。

「仲は、今でも良いと 思いたいです。しかし、ある日を境に距離ができてしまつて……。孫はまるで私のことを忘れてしまつたかのようだ」……「」

お爺さんの私を見る日は、なぜかとても優しげであつた。あと微妙にぼやかして話している気がするのは気のせいではないだろう。どうしてそのような話し方をするのかが私には分からないが、問い合わせるのも気が引ける。

しかし、ふとお爺さんの私を見る日に、妙な熱がこもつて いることに気付く。こちらはあるいは気のせいかもしれない。しかし、同時にこれ以上は話を続けてはいけない予感がしていた。だから私は本を閉じてベンチから立つ。

「じゃ、じゃあ、私はそろそろ帰りますね。もう日も暮れたことですし」

「もう日が暮れたから、ですか。こんな真夜中まで、灯りもつけずに一人で読書だなんて、随分と変わったことをする人だと思いましてが、帰る理由はなんとも普通ですね」

そう、私が手元の本を読み始めたのは、既に日が暮れてから”だつた。しかし灯りをつけずに読んでいるのもべつにおかしなこととは思わないし、お爺さんは今更になつてなにをいうのだろうか。

お爺さんの様子がいつもと違つ。いや、私の心境もいつもとは違うのだが、やはり大きく違うのはお爺さんの方だと思う。こんな風に私を引き止めることなんて今まで一度もなかつたし、そもそもいつも帰るのはお爺さんの方が先だつた。

最初に会つた時などは、私が人気のない黄昏じきに一人で読書してこるときにはやつてきたのだが、何やら変な物を見たような様子で、

話しかけるわけでもなく逃げるようになってしまった。それから何日も同じように私を見つけてはそれだけで帰つていいくのを繰り返して、じぱりとして私の方から話しかけたのだ。

「 もう少しだけ、お話をさせんか？」

だから、お爺さんの方に呼びとめられたのは初めてのことだった。しかし私はお爺さんがどこか寂しそうな様子でもあることに気が付く、仕方なしに再びベンチに座ついた。

「変な話をしてしまつてすみません。貴女に話してもしうつがないことなんですが、つい……」

年寄りの愚痴を聞くのも若者の務め、とこの言葉は呑み込んだ。いくら親しい仲でも流石に無礼が過ぎるだらう。

それよりも、私は話を切り替えることにする。

「 それはもうと、お爺さんいりやいんな夜中に向をされているんですか？」

「 おはすかしながら、もつ相当中にボケが進んでしましてね。気が付いたら想い出深いことに来てしまつてこるんですよ」

しつかりしてこるようになつて見せかけてボケが進んでいることは、わざとあるらしい。しかしそれにしては本当にしつかりして見える。

「これは身内の人間にとっては落差によるショックが大きいケースだ。

「ボケは自覚されているんですね」

「ええ、何が夢で何が現かわからないのは本当に大変です。先ほども貴女が孫に見えて、つい呼び止めてしまいましたよ」

「……」

「冗談にしては笑えなかつた。皿廻物のギャグは使うタイミングを間違えるととても悲惨である。

「うつかり連れて帰つたりしちゃダメですよ」

「さすがにそこまでは、まだボケとはいませんよ。孫も最近は身内でも男を避けたがる年頃ですし……」

私も思春期の頃は父に対してもそんな風だつただろ?つか。

それにしても、孫と他人への接し方が「こちやこちや」になつてているのは何故だらうか。ボケを自覚しているからわざとこいつしているのか、こうなるのもボケのせいなのかはわからないが、苦労の様子がうかがえる。

「いや……。あるいは意外と、わからないかもしませんね。最近では自分が何がしたいのか自分でさえよくわからないことがよくあら……」

「今もですか?」

「ま、まあ……。そうですね……」

かなりずけずけと聞いてみたが、どうやら図星だつたらしい。

先ほど私が感じた嫌な予感もそういうものが原因なのだらうか。

「今日は少し話をしそぎたせいが、頭が「じかや」じかやしてます。今

「田中さん、お帰るの？」と、元気な声がした。

私の言葉が不快だったのかもしない。あるいは混乱させてしまったのか。しかし私には逃げるより立ち上がるお爺さんを引き止める言葉がすぐに思いつかなかつた。

だから……。

「今日はまたやんのお話、ありがとうございました。……明日も、私はここにいるからね……」

私はお爺さんに明日の約束を取り付けて、お爺さんが了解の返事をするだけしてそのまま立ち去るのをただ見送つた。出かかった言葉を噛み殺して、ただ、見送つた……。

夜中、家に帰ると親に叱られた。

「一年ぶりにお盆休みで帰つてきたと思つたら遊びに出たきつでこんな時間まで連絡もなし！ まったく何やつてんの！」

「うう、うう」とお爺ちゃんに念っこ……」

とはいっても、帰つてきた瞬間に怒鳴りつけて来たのは母だけだつた。父も心配はしていて、布団に入ることなくリビングで待つていたようだが、言葉はなく椅子に座つて手招きしているばかりだ。私がまず母に対応すべきなのがどうかと迷つていると……。

「どうあれ、ここに来て座りなさい」

父の低い声でやうやく命じられると、考えるより先に身体が動いてしまった。

母も私が父に呼ばれてリビングに入つていくのを止めたりはせず、一緒にテーブル前の椅子に腰かけた。これはいわゆる家族会議の形である。

最初に口を開けたのは父で、柔らかな口調で問い合わせて来た。

「義父さんに会つてきたのか」

「う、うん……」

旧姓『笹原』の母は何か言つたそつだが、実の父親が話題に上つていることもあつてか、まずは夫に流れを任せているらしい。

「どうだつた?」

「えつと、元気だつたよ? 生きてたときよりも。でも、ボケてて私のことは分からぬみたいだつた。それでも毎年この時期には毎日会つに行つてゐるから、顔と声は覚えてくれたよ」

初めて会つた時、私がお爺ちゃんと呼びかけても、返事さえしてくれなかつた時のこと思い出す。最初のうちはまるで理性が無い、感情ばかりの田で私を見ていたものだ。今日も少しその気があつた氣はするが……。

私がすらすらと話すと、父は母の方を見てから、腕を組んで唸つた。母の意見を待つてゐるのか、あるいは去年の、私がいきなり丘の公園でお爺ちゃんを見たと言つだしたときのことを思い出しているのかかもしれない。

「ちなみに会いに行つてるのはあの丘の公園ね。いつもは夕方頃になると来てくれて、少しだけ話をすると帰っちゃうんだけど……」

父は『あの心靈スポットか……』と、言つて溜息をついた。確かに、あの公園はかつての古戦場跡であつたりと、その手の噂が湧きやすい立地ではある。しかしお爺ちゃんが現れるのは、生前からの公園が好きだったからに違ひなかつた。

「長話をするにしても、せめて連絡ぐらい入れても良かつたんじやないのか。義父さん相手に遠慮もいらぬだろ？」「俺達が心配することぐらい義父さんだつてわかつただろう」「だから、私が孫だつてことは分かつてもうえないんだつてば」「……」

胡散臭がられているのが肌で感じられた。しかし、嘘をついていないのなら正面から顔を見て向き合えばいいと私は信じている。

「その荷物は？」

「点字の本。最近になつてお爺ちゃんが私の読む本を聞いてくるようになつたから、今も勉強を続けていて、こんな本も読めるよつになつたよつて教えてあげようと思つて」

重い鞄の中から、お爺ちゃんが立派なものだと褒めてくれた本を取り出して見せる。

鞄の中に他には何も無いことを示すと、父はふむと唸つてみせた。しかし、母の方はといつと実の父を夜遊びの免罪符に使われたと思つたのか、口を固く結んで怒声を押さえこんでいるように見えた。しかし、この場で幽霊について私が語るようなことがあれば、それは油に火を注ぐようなものだろ？私の頭の中には一つも今の母にかけるような言葉が見当たらなかつた。

「そうか、まあ、何事もなかつたようで良かった。今日はもう夜も遅いから、シャワーだけ浴びて早く寝なさい」

父は私を逃がすようにそう言った。私も厚意に甘えて逃げるようリビングから出していく。

後ろ目で、私がその場から居なくなつたせいか、全身の力が抜けたようにテーブルに突つ伏して溜息をつく母の姿がチラリと見えた。あと、隣の席に座りなおして心配そうに母を見ている父の姿も。私はシャワーを浴びながら、自分の親不孝ぶりに溜息をついた。

（後書き）

叙述トリックといつものに挑戦しつつ、認知症などの知的障害者の介護について毒づくような作品を書いてみました。

内容への感想の他、まだまだ未熟な私の今後のため、文章構成などの改善点を指摘して頂ければ嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0692n/>

問題の多い介護士志願

2010年10月11日23時48分発行